

漢代の郡国文学

——尹湾漢墓簡牘の事例を手がかりとして——

西 川 利 文

はじめに

漢代の郡国には「文学」を職名に冠する属吏が存在した^①。それは文献史料では、郡文学あるいは文学卒史・文学掾・文学史・文学祭酒などと記される。これらの具体例は後に掲げることにして本稿では、郡国府に存在した文学を総称して郡国文学と表現しよう。ここでまず確認しておきたいのは、嚴耕望氏の研究以来この郡国文学という属吏は、郡国に設置された学校（いわゆる郡国学）において經書・經学の講授を中心とする教育を担当した、と一般に考えられていることである^②。

さて郡国文学については嚴氏の研究以後にもいくつかの研究があるが、それらはほぼ学校制度との関係が中心となっている。この研究の方向性に、基本的に異論はない。ただし従来の研究では、郡国文学がどのように任用されたのか、そして彼らが教育担当者として具体的にどのような役割を果たしたのかについて、やや分析が弱いように感じられる。確かに郡国など地方行政府の属吏は一般的に地元の人材から任用されるから、第一の問題はいまさら問うべき問題でないようにも見える。また第二の問題も、郡国学における經書・經学の講授が中心であり、これでは何ら問題がないようにも思える。

しかし第一の郡国文学の任用方法については、従来から通常の属吏任用とは異なることが指摘されている。⁽⁵⁾それは、次に掲げる『史記』卷九六張丞相伝の褚少孫補筆部分にある、匡衡伝の記事に端的に現われていると考える。そこには「丞相匡衡は、東海の人なり。……才下にして数し射策するも中らず、九たびに至り、乃ち丙科に中る。其の経、科に中らざるを以ての故に明習す。平原文学卒史に補せらる（丞相匡衡者、東海人也。……才下、数射策不中、至九、乃中丙科。其経以不中科故明習。補平原文学卒史）」とある。ここでまず注目すべきは、東海郡出身の彼が、出身郡とは異なる平原郡の文学に任用されていることである。これは、郡国府の属吏が地元の人材から採用されるという、漢代の一般的な傾向とは異なる。そしてこれに加えて注目すべきは、彼の任用が射策と関連して行われたことである。後述するようにこの任用過程には若干の問題があるものの、射策は博士弟子制度という中央政府が行う官吏養成制度下での卒業試験だったことからすれば、それと関連して行われる任用は、郡国府ではなく、中央政府によって行われたと考えられる。すなわち、少なくとも郡国文学の一部には、確実に中央政府から派遣された者が存在するのである。⁽⁶⁾

ただし従来は、史料的な限界によって、必ずしもこれを明確に証明できなかった。ところが、近年出土した尹湾漢墓簡牘の三号と四号という二枚の木牘（以下、尹湾三・四号木牘とする）に見える記事には、郡国文学が中央政府によって任用された可能性を補強する例が記されていた。⁽⁷⁾そこで本稿ではまず、この出土資料を手がかりに郡国文学の任用方法について検討し、文献史料の事例との整合を図りたい。そして郡国文学が中央派遣だとすれば、彼らの任務には、経書・経学の講授にとどまらず、中央政府の政策と連動するものがあつたとも考えられる。そこで本稿では、彼らの郡国府における役割も検討しよう。なお「文学」を職名に冠する属吏は、郡国以外に州や中央官府にも存在した。比較的史料の少ない郡国文学を考える際、このような郡国文学以外の文学の記載も有力な手がかりとなる点があるので、これらの文学をも取り上げて分析する。

一 尹湾漢墓簡牘に見える郡国文学

最初に、本稿の分析の手がかりとなる尹湾三・四号木牘に見える郡国文学について確認し、問題の所在を示しておこう。この二枚の木牘は、報告書『尹湾漢墓簡牘』⁽⁸⁾で「東海郡下轄長吏名籍」という仮称が付けられるように、前漢成帝期の東海郡に所属した県クラスの行政を担当した、一四五名の官僚すなわち長吏⁽⁹⁾に関する記録である。そこには、現任長吏の姓名ばかりではなく、彼らの出身郡県や前職、現職への異動理由も記されており、また長官にとどまらず、文献史料ではほとんど見られない丞・尉という次官クラスの長吏も見える。このことから従来の研究では見えなかった長吏任用の新たな一端がうかがえる。⁽¹⁰⁾

本稿で問題とする郡国文学に関する記載は、このような尹湾三・四号木牘の記事のうちで「故○○」によって示される前職の項目に見える。それを具体的に示せば次のようになる。⁽¹¹⁾

- ① 胸邑左尉、楚国菑丘、田章始、故東郡大守文学、以廉遷 (3A-2-4)
- ② 曲陽丞、沛郡相、朱博、故東郡大守文学卒史、以功遷 (3B-1-13)
- ③ 武陽相、山陽郡单父、張臨、故東郡大守文学卒史、以廉遷 (4A-1-7)
- ④ 新陽相、山陽郡橐、張蓋之、故河内大守文学卒史、以廉遷 (4A-1-9)
- ⑤ 平曲侯家丞、山陽郡瑕丘、管儀、故山陽大守文学卒史、以功遷 (4A-2-9)
- ⑥ 良成丞、山陽郡橐、宣聖、故大山大守文学卒史、以功遷 (3B-2-12)
- ⑦ 都陽侯家丞、陳留郡成安、韓訢、故上党大守文学卒史、以功遷 (4A-2-15)
- ⑧ 都郷侯家丞、魯国魯、曹熈、故桂陽大守文学卒史、以功遷 (4A-2-16)
- ⑨ 武陽侯国丞、汝南郡西華邑、尹慶、故武都大守文学卒史、以功遷 (4A-1-8)

⑩曲陽尉、汝南郡召陵、夏聖（僅？）、故南海大守文学卒史、以功遷（3B-1-14）

⑪平曲丞、潁川郡長社、□□、故潁陽大守□□□□、以功遷（3B-3-2）

この一一例のうち最後の⑩は前職の後半四文字が不明であるが、それは「文学卒史」と考えるのが妥当である。

この点は先行研究でも触れられているが、筆者がこのように判断する最大の理由は、次に述べるように「大守」の前に具体的な任用郡名が入るのは、郡国文学しかないということである。なお①を除くとすべて「文学卒史」となっており、①の「文学」も他の例と異動傾向も変わらないから、「卒史」が省略されたものと考えるべきだろう（後述）。ちなみに⑩の郡名は文字が不鮮明で判読できないが、それが郡名だとすれば「漁陽」となる¹³。

さて右の郡国文学の事例を見ると、彼らのほとんどが出身郡国とは異なる郡国に任用されていることに気付く。

例えば①は、楚国出身なのにもかかわらず、東郡の文学に任用されており、このことは一一例中一〇例までについていえる。また唯一地元の郡国文学に任用された⑤についても、「山陽大守文学卒史」として任用郡名が明記される。このような記載は、尹湾三・四号木牘の記載の中でも異例に属する¹⁴。これを、他の属吏出身者の記載を参照して確認しておこう。まず郡国文学と同じ郡国の属吏だった者を挙げると次の通りである。

(1)南城尉、山陽郡東緡、陳順、故大守卒史、以功遷（3B-2-16）

(2)容丘尉、潁川潁陰、東門湯、故大守卒史、以功遷（3B-2-19）

(3)即丘左尉、潁川郡潁陰、王昌、故大守卒史、以功遷（3A-3-6）

(4)戚右尉、汝南汝陰、肩□、故大守属、以廉遷（3A-2-9）

(5)承丞、廬江郡虜婁、莊戌、故督盜賊、以捕斬羣盜（3B-2-2）

(6)胸邑右尉、楚国彭城、□殷、故相書佐、以廉遷（3A-2-5）

(7)襄賁左尉、梁国碭、陳褒、故相書佐、以廉遷（3A-2-12）

(8) 臨沂長、魯国魯、丁武、故相守史、以挙方正除 (3B-1-16)

(9) 塩官長、琅邪郡東莞、徐政、故都尉属、以廉遷 (4A-1-11)

この九名のうち(5)を除くと、いずれも「大守」「相」「都尉」と所属官府は記されるものの、郡国名は記されない。また(5)も「督盜賊」とあるのみで、郡国名は記されない。ここで彼らの出身郡国と所属官府との関係を確認すると、郡出身者の場合は「大守」「都尉」と記されるのに対して、王国出身者は「相」と記される。これは、彼らが地元の属吏に任用されたことを意味すると考えられる。

ところで、尹湾三・四号木牘の属吏出身者の中には、郡国文学と同様に任用された地名の記される例が若干ある。それは県の有秩や州の從事史で、彼らの中には県(郷)名や州名の記されるものがある。ただこれらの例は廖伯源氏の考証によって、出身と同一郡国内の他県や出身郡国が所属する州だということが確認されている⁽¹⁵⁾。従って尹湾三・四号木牘の記載の一般的な原則は、郡国を中心にして、同一郡国内でも出身県以外の属吏に任用された場合は地名を記し、また州の属吏の場合は、出身郡が所属する州でも必ず州名を記したといえよう。このように考えると、県や州の属吏に地名が記される例があるものの、郡国を中心に見れば尹湾三・四号木牘に見える地方官府の属吏は、基本的には文献史料の場合と同様に地元に採用され、それ故に任用地名は省略されたと見て間違いない。

以上のようにいえるのであれば、地元任用されても必ず任用郡国名が記される郡国文学は、明らかに尹湾三・四号木牘の記載方法の中で異例に属する。そしてその多くが出身郡国以外の郡国文学に任用されていることは、彼らの任用が通常の属吏任用と異なっていたのではないかと考えられる。これについて廖伯源氏は、基本的には郡国の守相によって任用されると考え、郡国文学が他郡国から任用されるのは、彼らが民政にかかわらないからであり、このような人材は地元から任用する必要がなかったという⁽¹⁶⁾。しかしこのように考えると、もう少し地元任用された者が存在しても不思議ではないのに、一一例中一〇例までが出身以外の郡国に任用され、しかも地元任用され

でもなぜ任用郡国名が記されているのが問題となる。

そこで考えられるのが、廖氏も可能性として指摘する、中央政府による任用である。これについて廖氏は積極的に支持していないが^①、はじめに掲げた匡衡の例を参照すれば、郡国文学が中央政府によって任用された可能性が高まる。

匡衡は、射策受験をきっかけとして、地元の東海郡ではなく、平原郡の文学に中央政府によって任用された。その表記としての「平原文学卒史」は、郡と同意の「大守」という表記の有無を除くと、尹湾三・四号木牘の郡国文学の表記と一致する。そして「平原」は郡名だから、匡衡の場合も「平原大守文学卒史」と表記することも不可能ではない。ここからすれば、尹湾三・四号木牘の郡国文学も、匡衡と同様の手続きによって、出身以外の郡国に任用されたと考えるのが最も妥当なのではなからうか。特に地元（山陽郡）の郡国文学に任用されながら「山陽大守文学卒史」と表記される⑤の事例は、その任用が郡国府ではなく、中央政府によって行われたことを端的に示すと考えられる。すなわち尹湾三・四号木牘の郡国文学は、中央政府に任用されたからこそ「〇〇大守文学卒史」として必ず任用郡国名が記されたと考えられるのである。そしてこのように考えると、文献史料に見える郡国文学も、匡衡の場合のみならず、その他の者も、本来は任用郡国名が記されていた可能性も否定できなくなる。すなわち文献史料に見える郡国文学も本来、中央政府の任用だったことによって任用郡国名が記され、一般の属吏と表記が異なっていたにもかかわらず、文献史料では他の属吏と同様に、郡国名が省略されてしまった可能性が高いと考えられるのである。

ところで廖氏が郡国文学の中央政府による任用を積極的に支持しないのは、文献史料には、郡国文学が郡国の守相によって任用されたように見える記事も存在するからである。しかし郡国文学の郡国府による任用を示唆する史料は、後漢時代のものが多いようである。とすれば、匡衡は前漢時代の例だから、前漢時代は中央政府の任用だっ

たものが、後漢時代には郡国府の任用に変化したと考えることもできる。そこで次に文献史料の内容を検討して、筆者の考え方が裏付けられるか否かを確認しよう。

二 文献史料に見える郡国文学

まずは、文献史料に見える郡国文学を摘出しておこう。ここでは尹湾三・四号木牘との関連で、郡国文学としての彼らの表記、および出身郡国と任用郡国との関係に注意し、さらに時期的な変化の有無を見るために、どの時期に任用されたのかという点にも注意して一覧表にまとめた¹⁹⁾。なお任用郡国については、出典から直接判明するか、または関連史料から判明する場合にのみ郡国名を入れ、不明のものについては空白にし、出身郡国と任用郡国とが一致しているものには○、一致していないものには×、任用郡国が不明なものには？を付した。

一覧表に掲げたのは二〇例であるが、の中には「為郡文学」とのみ記されて任用された郡国が判明しない場合も多い。その結果、任用郡国が史料的に確認できるのは一一例にとどまる。これらを除く任用郡国不明の九例は従来、一般の属吏と同様に地元任用されたと考えられてきたが、ここまで述べてきたことからすれば、彼らを直ちに地元任用されたとは判断できなくなる。そこでここではまず、出身郡国と任用郡国との関係の判明する例を取り上げて分析しよう。

一覧表を見ると任用郡国の判明する一一例のうち、七例(a・d・n・o・q・r・s)は地元任用されているが、一方で尹湾三・四号木牘の事例と同様に地元以外の郡国に任用されている者も四例(f・l・m・t)存在する。すなわち文献史料でも、出身郡国以外の郡国文学に任用された者が少なからず存在し、匡衡の例(f)が決して例外ではないことが判明するのである(以下の分析で一覧表に掲げた郡国文学に関する記事を参照する場合は、特にことわらない限り一覧表に示した出典に基づく)。

両漢郡国文学一覧

	時期	姓 名	表 記	出身郡国	任用郡国	出 典
a	武帝	雋不疑	郡文学	勃海	勃海 ○	『漢書』 卷七一
b	昭帝	韓延寿	郡文学	京兆尹	?	『漢書』 卷七六
c	宣帝	翟公	郡文学	汝南	?	『漢書』 卷八四
d	宣帝	蓋寛饒	郡文学	魏郡	魏郡 ○	『漢書』 卷七七
e	宣帝	張禹	郡文学	左馮翊	?	『漢書』 卷八一
f	宣帝	匡衡	平原文学卒史 平原文学	東海 東海	平原 × 平原	『史記』 卷九六 『漢書』 卷八一
g	元帝	諸葛豊	郡文学	琅邪	?	『漢書』 卷七七
h	成帝	梅福	郡文学	九江	?	『漢書』 卷六七
i	成帝	鄭崇	郡文学史	右扶風	?	『漢書』 卷七七
j	王莽	崔篆	郡文学	涿郡	?	『後漢書』 伝四二
k	光武	杜篤	郡文学掾	京兆	?	『後漢書』 伝七〇
l	光武	張玄	弘農文学	河内	弘農 ×	『後漢書』 伝六九下
m	光武	魏邈	濟陰王文学	東平	濟陰 ×	『後漢書』 伝六九下
n	章帝	楊由	郡文学掾	蜀郡	蜀郡 ○	『後漢書』 伝七二上
o	章帝	呉祐	文学	陳留	陳留 ○	『後漢書』 伝五四
p	和帝	楊倫	郡文学掾	陳留	?	『後漢書』 伝六九上
q	桓帝	趙芬	郡文学掾	巴郡	巴郡 ○	『華陽国志』 卷一
r	靈帝	趙寧	文学	蜀郡	蜀郡 ○	『華陽国志』 卷三
s	献帝	楽詳	文学祭酒	河東	河東 ○	『後漢書』 伝六九下
t	三国	管輅	文学掾	平原	清河 ×	『三国志』 卷二九

ところで地元の郡国文学に任用された者については、なお注意を要する点がある。それは、彼らの中には誰によって任用されたか判明しない例も存在することである。例えば雋不疑(a)は、直指使者の暴勝之が「勃海」に至って彼と会ったことから、地元任用されていることが判明するのみで、その任用が誰によって行われたかは判明しない⁽¹⁹⁾。また蓋寛饒(d)は郡国文学就任後に、地元の人材を察挙の対象とする孝廉に察挙されているから、地元の郡国文学に任用されたのであろうが、誰によってその任用が行われたのかまでは判明しない⁽²⁰⁾。同様のことは、楊由(n)と趙芬(q)の場合についてもいえる。従って、郡国の守相によって地元の郡国文学に任用されたと判明するのは呉祐(o)・趙寧(r)・楽詳(s)の三名となる⁽²¹⁾。そこでこの三名の任用時期を確認すると、いずれも後漢時代であって、前漢時代ではないのである。ここか

ら、「為郡文学」とのみあつて任用郡国の不明な前漢時代の郡国文学については、地元任用されたか否かはもちろんのこと、任用者が郡国の守相だったか否かについても、これを判定するのは容易ではなくなる。すなわち前漢時代には、郡国文学の任用が郡国の守相によって行われたと確実に裏付けられる例は、存在しないのである。

次に、出身郡国以外の郡国文学に任用された者の場合を確認しておこう。最初に管輅(7)の場合は、平原郡出身でありながら、清河太守の華表によって清河郡の文学掾に任用されている。⁽²³⁾これは明らかに他郡国の郡国文学に任用された例だが、嚴耕望氏も指摘するように、族兄に従つて清河郡に客居していたこと、そして平原郡と清河郡が隣接し、しかも時期的に三国期という混乱期だったことなどを考えれば、例外的な任用といえるかもしれない。⁽²⁴⁾特にこの場合、郡太守自らがその任用を行つており、右に見た後漢時代の例と共通することが注目される。ところが、残る三例の任用は管輅の場合とは明らかに異なる。

まず匡衡(f)である。彼についてはこれまで触れたように、射策受験の後に出身郡以外の郡国文学に任用された。その時期は、前漢宣帝期である。ただし彼の場合、一覧表に示したように『史記』の他に、『漢書』にも郡国文学への任用過程を記した記事があり、両者でその内容が若干異なる。『漢書』の記事を確認すると、そこには「匡衡、字は稚圭、東海承の人なり。……衡、射策甲科なるも、令に応ぜざるを以て、除されて太常掌故と為り、平原文学に調補せらる(匡衡、字稚圭、東海承人也。……衡、射策甲科、以不応令、除為太常掌故、調補平原文学)」とあり、「平原文学」に任用される以前に「太常掌故」に除されている。これによれば射策の結果任用されたのは、郡国文学ではなく、中央官府の属吏ということになる。従つてここからは、郡国文学への任用が中央政府によつて行われたと、みなせなくなる可能性がある。しかし『漢書』には、彼の平原文学への任用後に、「学者」たちが彼を中央官府の属吏へ任用するように「上書」している。⁽²⁵⁾これは結果的に宣帝に却下されたものの、任用変更の要請が宣帝への「上書」という形式で行われたことからすれば、彼の平原文学への任用が中央政府によつて行わ

れたことを物語るのではなからうか。一方はじめに掲げた『史記』の記載では、射策受験と郡国文学への任用の間に「其経以不中科故明習」という一文が入り、必ずしも郡国文学への任用が射策と直結しておらず、郡国文学就任以前の経歴が欠落している可能性がある。従って筆者は、『漢書』も『史記』も同様の内容を記しているものと考え⁽²⁶⁾える。このようにいえるのであれば、射策の結果か否かは後に検討することにして、匡衡の郡国文学への任用は、はじめに述べたように中央政府によって行われたと考えて間違ひなからう。

次に、河内郡出身でありながら「弘農文学」に任用された張玄（一）と、東平国出身でありながら「済陰王文学」に任用された魏応（m）の場合を検討しよう。彼らはいずれも、光武帝期に「明経に挙げられて」郡国文学に任用されている。⁽²⁷⁾ちなみに、後漢時代の首都所在地である河南郡周辺でも三輔地域と同様に、他郡国出身者を属吏に任用できたという浜口重国氏の指摘を参照すれば、張玄の場合、出身の河内郡と任用された弘農郡はいずれも司隸部に属するから、例外的な任用だったともいえる。しかし浜口氏のいう例外的な属吏任用は、あくまで郡国の守相自らが行うものであり、張玄のような「明経」による任用を同列にみなすことはできない。何故なら「明経」は、⁽²⁸⁾察举科目の一つとして中央政府の行うものであり、郡国の守相が行う通常の属吏任用とはみなせないからである。

以上のように地元以外の郡国文学に任用された者を見ると、管輅の場合を例外とすれば、ある共通性が見出される。まず管輅以外の三例はいずれも任用郡国が記され、さらに彼らの郡国文学就任時期が前漢宣帝期から後漢光武帝期の間となることである。特に任用時期については、右に指摘した郡国の守相が任用を行ったと確認できる時期との間に、明らかに一線を劃することになる。そして何よりも注目すべきは、この三名がいずれも、中央政府の主導によって郡国文学に任用されたと考えられることである。ここから大まかな傾向として郡国文学の任用は、前漢時代から後漢光武帝期には中央政府が行い、それ以降は郡国の守相が行ったと想定することができる。これがいえるのであれば、この三例と重なる時期の成帝期に任用された尹湾三・四号木牘の郡国文学も、中央政府によって任用

された可能性が高くなる。特に匡衡が、前述のように尹湾三・四号木牘の例と同様に、『史記』では「平原文学卒史」と表記されることは、この可能性を一層高める。

さて、このような観点でこれまで保留してきた任用郡国の不明確な九例を検討してみると、彼らの中にも前漢時代の事例を中心として、郡国の守相によつて任用されたとは思えないような記事も見出せる。例えば張禹（e）は「長安に至りて学」び、その後「挙げられて郡文学と為」っていることから、太学で学んだ可能性があり、匡衡と同様の過程を経て郡国文学に任用されたとも考えられるし、また「挙」字に注目すれば、明経察挙のような何らかの察挙が適用されたとも想定できる。⁽³⁰⁾この張禹と同様の可能性は「少くして長安に学」んだ梅福（h）にも指摘できるし、また「経に明らかなる（明経）を以て郡文学と為」った諸葛豊（g）には、明経察挙による任用の可能性もある。⁽³¹⁾このように、郡国の守相以外によつて任用された可能性が完全に排除できない前漢時代の郡国文学については、地元の郡国の守相によつて任用された、簡単に判断できないのである。そこで次に、中央政府による任用が実際にどのように行われるのかを確認し、果たして彼らが本稿で述べるような中央政府による任用だったか否かを考えてみよう。

三 郡国文学の任用

郡国文学の任用で、最も明確に中央政府の関与が現われるのが明経察挙である。まずはこれについて、筆者が以前に分析した結果を確認しておこう。⁽³²⁾

明経は、前漢平帝期頃から郡国を対象として、不定期の察挙である制科として行われた。ただしこれによつて察挙されると、直ちに何らかの官職が与えられるのではなく、察挙後の試験の結果によつて決定された。その官職について具体的規定は残っていないが、史料を点検してみると、郎中・太子舍人そして郡国文学などに任用されたこ

とが判明する。このうち郡国文学に任用されたのは前に示した張玄・魏応の二名であるが、このように察挙の結果によってその任用が行われるのだから、その人事が中央政府によって行われたことは確実である。

次に郡国文学の任用に中央政府の関与がうかがわれるのは、前漢武帝期に出された「功令」の規定である。これは、本稿でたびたび取り上げた射策に関する規定が盛り込まれた規定である。この「功令」によって郡国文学の任用がどのように行われるのかについて、筆者が以前に分析した結果に基づいて確認しておこう。³³

「功令」は、武帝の元朔五年（前一二四）に創始された博士弟子制度の内容を規定したもので、その記事は『史記』卷一二一および『漢書』卷八八の兩儒林伝にある。この「功令」の規定する博士弟子制度の性格を一言でいえば、国家の行う教育制度であるとともに、官吏養成制度でもある。「功令」によれば、博士弟子に選拔された者は、一年の勉強（儒家思想の学習）を終えた後、卒業試験として射策が課される。その結果、博士弟子には射策の成績に依じて、官秩の異なる官に任用される。その官としては、六百石クラスの官僚や比三百石の郎中、そして太常の属吏である文学掌故があつた。³⁴ここで注意すべきは、ここには郡国文学に任用する規定はないということである。確かに『漢儀』の射策規定には、郎中・太子舍人と並んで「郡国文学」への任用があるが、これは後漢時代でもかなり後の時期だと考えられ、少なくとも前漢時代の実態を反映したものではなさそうである。³⁵すなわち、創始当初の「功令」には、射策によって直ちに郡国文学に任用されることはないということである。

さて、射策受験者（博士弟子）が直接郡国文学に任用されないとすれば、彼らはいかにして郡国文学に任用されるのだろうか。それは「功令」の中でも後半部分に規定されている。それによると、文学掌故を含む現任属吏を中央官府（内史・大行）や郡府の属吏（卒史・属）に任用（異動）することになっている。³⁶従つて郡国文学に任用される可能性があるのは、射策受験者の中でも文学掌故に任用された者のみということになる。その実例が前に示した匡衡の場合だと考えられる。それ故に前に『史記』の記載では、太常掌故への任用に関する記事が欠落している

と考えた。すなわち任用過程としては『漢書』の方が妥当である。ちなみに郡国文学ではないが、射策によって「掌故」となつてから「廷尉文学卒史」に補された兒寛の例も、その一例と考えられよう。そうすると正確にいえば郡国文学に任用されるのは、博士弟子制度のもとで行われる射策によってではなく、それと一体になっている「功令」後半部分の規定によることになる。

以上のように、明経察挙では中央政府の関与が明確に現われるのに対して、「功令」では、博士弟子制度（射策）の規定と一体になっている後半部分の規定によって、郡国文学の任用が行われる。それではそこでは、どのような形で中央政府が関与するのだろうか。「功令」後半部分の規定は、前半をなす博士弟子制度の一環として提案され武帝によつて裁可されているから、本来両者は「功令」として一体になっている。⁽³⁸⁾しかしそこで対象とされるのは、射策によつて任用された文学掌故という特定の属吏のみではなく、すべての官府の属吏だということに注目したい。すなわちこの規定では、基本的には一般の属吏で儒家的知識の豊富な者から任用し（「先用誦多者」）、それでも足らなければ（「若不足」）掌故や文学掌故を用い、中央官府や郡府の属吏に任用することになっているのである。⁽³⁹⁾従つてここでは、掌故や文学掌故よりも他の属吏が優先されており、射策受験は前提とはされず、むしろ文学掌故は補完的な存在となる。

このように「功令」後半部分の規定では、すべての官府の属吏を対象として配置転換を行うことになっているのだから、その人事は中央政府の関与なしに行つたとは考えられない。ただし必ず所属官府以外の属吏に任用するようには規定されていないから、当該官府に適当な属吏がいれば、その人材が採用されることも論理的には可能である。特に郡府についていえば、本籍地回避制の適用される官僚の異動の場合と違って、出身郡国に任用されることもあり得たと考えられる。すなわち中央政府の関与とは「功令」という一元的制度によつて、必要とする有為の人材を、その配置が必要だと認められる官府へ、中央政府が所属官府や出身郡国にかかわらず任用することだったと

考えるのである。

ところで「功令」後半部分の規定では、異動先の属吏は単に「卒史」「属」と称されて、そこには「文学」の文字は見えない⁽⁴⁰⁾。従って「卒史」や「属」のみで「文学」の付かない属吏の中にも、中央政府によって任用された者が存在する可能性がある。しかし実際に異動した匡衡や兎寛の場合には、その職名に「文学」が冠せられていた。ここからは、中央政府から「功令」の規定に従って任用された属吏には、職名に「文学」の名称が付されたとの推測もできる。何故なら、儒家的知識の豊富な者は「文学」と称するにふさわしい⁽⁴¹⁾、特に地方官府については、本来中央政府の介入できない属吏の人事に中央政府が関与するのだから、地方官府が独自に任用した属吏と、中央政府の任用した属吏とを分ける必要もあつたと考えられるからである。それ故に明経察挙の場合も「文学」として任用されたのではなからうか。すなわち「文学」という職名は、中央政府が儒家的知識を持った者を専門職の属吏として任用したことを示すものだと考えるのである⁽⁴²⁾。

このように考えれば、少なくとも前漢時代から後漢光武帝期までの郡国文学は、「功令」後半部分の規定や明経察挙によって、中央政府が任用した者だと考えられる。ただし明経察挙の開始は前述のように前漢末の平帝期だと考えられるから、それ以前の例は「功令」後半部分の規定が適用されたとみなすのが妥当だろう。特に太学に学んだ可能性の高い張禹(e)・梅福(h)らはこのようにいえるだろうし、また明経察挙開始以前に「明経」として郡国文学に任用された諸葛豊(g)や蓋寛饒(d)も、この「明経」を評価の語として考えれば「先に誦の多き者を用う」という規定によって、当然優先的に採用されたはずである。すなわち明経察挙開始以前の前漢時代の郡国文学はいずれも、「功令」後半部分の規定に基づいて中央政府から任用されたと考えられるのである⁽⁴³⁾。

さて以上のように考えると尹湾三・四号木牘の郡国文学も、博士弟子として射策を受験したか否かは別にして、「功令」後半部分の規定に従って中央政府から任用されたと考えて間違いない。何故なら、彼らはこの木牘が作成

された成帝期には長吏として在職し、郡国文学への就任は当然それ以前となり、ここまで述べてきたことによれば、この時期には郡国の守相によって任用される可能性も、明経に察挙される可能性もないと考えられるからである。

すなわち尹湾三・四号木牘の郡国文学は、中央から任用されたが故に、たとえ地元の郡国文学に任用されたとしても郡国名が記されたのである。このように考えれば、文献史料に見える郡国文学で少なくとも前漢時代の例も本来は、匡衡（f）の場合のように任用郡国名が記されたのだろう。その郡国名が省略されるのは、彼らが結果的に地元任用されたことによるのかもしれない。ただしここで改めて確認すべきは、彼らがたとえ地元任用されたとしても、それは郡国の守相によって行われたものではないのである。

ところで、仮に文献史料に残る任用郡国名の記されない郡国文学が地元任用されたとすると、尹湾三・四号木牘では郡国文学のほとんどが出身郡国以外に任用されるのが異様に見える。しかし尹湾三・四号木牘のような任用が、当時は一般的だったのではないかと考える。それは、他郡国に任用された匡衡（f）が「郡尊敬せず」（『史記』）と記されることからうかがえる。彼は、儒家的知識が豊富にあつたにもかかわらず、出身とは異なる平原郡に任用されたことによつて、郡国文学としての立場を認められなかった。これは、地元任用された雋不疑（a）が「進退には必ず礼を以てし、名は州郡に聞こゆ」といわれるのと好対照をなす。尹湾三・四号木牘の郡国文学も⑤のように地元任用された者以外は、匡衡のような「尊敬されざる」立場に置かれたものではなからうか。このように考えれば文献史料に残る郡国文学の周辺には、それをはるかに上回る郡国文学が存在したものの、彼らの多くは出身以外の郡国に任用されたことによつて、そこでは「尊敬されざる」存在となり、結局は昇進の機会に与ることなく歴史から消え去つたと考えられる。

確かに尹湾三・四号木牘の事例では、功次や廉によつて二百石から三百石の官僚に異動しており、その限りでは昇進に不利だったとは必ずしもいえない。しかし尹湾三・四号木牘の事例からは、四百石以下の官僚の多くがその

地位で昇進が頭打ちとなり、属吏在職中に察舉などによって、より高い官秩の官に就官する必要があったことが読み取れる。⁽⁴³⁾ところが地元以外の郡国文学に任用された者は、地元の人材を対象とする孝廉や茂才（秀才）という有力な昇進機会がなくなってしまう。このような立場に置かれた場合、余程の拔擢がない限り容易に昇進の機会がなくなることを意味する。匡衡の場合も昇進にかなりの時間を要し、公府による辟召によって昇進の機会を得た。⁽⁴⁴⁾また文献史料に見える前漢時代の郡国文学の多くも、匡衡と同様に中央政府の官僚とつながりを持っていた。⁽⁴⁵⁾すなわち尹湾三・四号木牘の郡国文学は一定の昇進はしたものの、匡衡らのような拔擢の機会に与ることなく、その生涯を終えたと考えられるのである。

さて前漢時代から後漢光武帝期までの郡国文学の任用を以上のように考えるところとして、それ以降には何故、郡国の守相による郡国文学の任用が行われるのだろうか。そこには、右に述べたような昇進の問題があると考えられるが、それだけでは人事権が郡国の守相に移る理由が説明できない。筆者は人事権が郡国の守相に移る根本的な原因として、「功令」に基づく博士弟子制度および明經察舉の機能の問題があると考える。博士弟子制度は、元帝期以降に博士弟子定員の急増という事態によって変質・衰退していき、また射策を補充する察舉科目として行われるようになる明經も、後漢章帝期以降には十分に機能しなくなる一方で、儒家思想の地方社会への浸透によって広範な明經者が各郡国に存在するようになったと考えられる。⁽⁴⁶⁾このような状況の時、中央政府の人事を待たなくとも、郡国府において十分に郡国文学の任用が行える人的基盤ができあがっており、郡国の守相自らが任用を行える状況にあったと推測される。

このようにして任用の主導権が郡国の守相に移ったと考えられるが、後漢章帝期以降も射策や明經察舉に関する規定が存在するから、中央政府が射策や明經によって郡国文学の任用を行おうとしたことは確実である。⁽⁴⁸⁾従って正確にいえば、ここでいう任用の主導権の移行というのは、中央政府による郡国文学任用の必要性が減退して史料で

は確認できなくなるのに対して、郡国の守相による任用が新たに登場してきたということである。

四 文学卒史から文学掾へ

ところで、以上のような任用主体の変化と並んで、前漢時代から後漢時代に移行するに従って、郡国文学の名称に変化が見られる。前掲の一覧表を見ると、前漢時代から王莽期にかけては「郡文学」と記される場合が多いのに対して、後漢時代には「文学掾」という表記が目立つようになる。この変化は、典拠となる史料の性格の違いではなく、郡国府の機構的变化を反映しているようである。しかし従来の研究では、郡国文学は一貫して「文学掾」「文学史」と呼ばれ、「郡文学」という表記はその省略だと考えられ、このような表記の変化には、ほとんど注意が払われていないようである。そこでここでは、本稿が想定するような郡国文学の表記の変化が何を意味するのかを検討しよう。

まず、尹湾三・四号木牘ではほとんどが「〇〇大守文学卒史」と記され、その省略形として「〇〇大守文学」と表記される例も存在したこと思い出してもらいたい。これからすると、前漢時代の「郡文学」は「卒史」が省略されたものとも考えられる。これがいえるとなれば郡国文学の一般的な表記は、前漢時代には「卒史」で、後漢時代には「掾」だったといえるのではなからうか。

前漢時代の郡国文学が「卒史」だった可能性を示唆する記事は、尹湾三・四号木牘ばかりではなく文献史料にも散見する。例えば『史記』卷一二六滑稽伝には、武帝期の北海郡に「文学卒史王先生」なる存在があったことが記される。また同じ武帝期には、前にも触れた兕寛が「廷尉文学卒史」と記される。ここから「功令」施行当初から、郡国文学をはじめとする各官府の文学は「卒史」だった可能性が高くなる。さらに宣帝期に任用された匡衡は、『史記』では「平原文学卒史」と記される⁵⁰。これらに成帝期になる尹湾三・四号木牘の事例を加えれば、武帝期か

ら成帝期までの郡国文学は「卒史」だったといえよう。

しかし前漢時代の例の中にも、郡国文学が「史」だった可能性を示唆する例がある。それは「郡文学史」とされる鄭崇（h）の例である。⁵¹ただし彼が任用されたのは尹湾三・四号木牘と同時期の成帝期である。さらに滑稽伝や匡衡に関する記事を加筆した褚少孫は、元帝・成帝頃の人といわれる。⁵²とすれば「文学卒史」が当時の一般的な呼称だったと考えるのが妥当である。すなわち鄭崇の「郡文学史」は、「卒」字の脱落したものだと考えられるのである。⁵³このように考えれば郡国文学は、前漢時代から一貫して「掾」や「史」だったのではなく、前漢時代には「文学卒史」、後漢時代には「文学掾」と呼ばれ、「文学」はいずれかの省略型だったとみなすのが妥当である。⁵⁴

それでは、このような郡国文学の呼称の変化は何を意味するのだろうか。そこには、郡国府における属吏機構の肥大化とその整備があると考ええる。前漢時代の郡国府の基本的な属吏機構は、前に掲げた尹湾三・四号木牘の郡国の一般属吏に見られるように、卒史・属・書佐などの存在があった。この属吏機構は小さなもので、例えば尹湾一号・二号木牘にも現われるように数十名前後だったのに対して、後漢時代になると一〇〇名を超える郡国も見られるようになり明らかに肥大化してくる。⁵⁵この過程で郡国府で起こってくるのが、諸曹の形成と「門下」を冠する新たな属吏の出現である。第一の諸曹の形成については早くに嚴耕望氏が指摘し、近年では佐原康夫氏が明らかにしたように、前漢宣帝期頃から明確化してくる。⁵⁶それを象徴するのが、功曹や議曹など「曹」字を伴う職名が郡国の属吏の中に見えるようになることであり、それとともに「諸曹掾史」というように、後漢時代の郡国府には各「曹」（部局）に分かれた掾や史の中心となる属吏機構が定着する。そして第二の「門下」の出現とは、従来の私的なそれに代わって、郡国の守相の側近としての「門下」の出現である。佐原氏によれば、これは前漢後半期（武帝期）頃から現われ、やがて側近としてのエリート属吏になる。この二つの流れを前提として肥大化した郡国府の属吏機構は、後漢時代には整備され定着する。

ところで一連の尹湾漢墓簡牘を出土した六号墓の墓主の師饒は、前漢成帝期に東海郡の功曹を勤めた。この時期は、右のような郡国府の属吏機構の肥大化とその整備が行われつつあった時期に当たり、その実態が地方行政関係の木牘の中に現われていると考える。以前に指摘したように、尹湾一号・二号木牘に見える太守府の属吏数は当時の東海郡の属吏定員を表し、一方尹湾五号木牘背面の属吏数は、同じく太守府の属吏数を表すものの定員外の者も含んだ数だと考えられる。それは、尹湾五号木牘背面の属吏数が尹湾一号・二号木牘のものよりもはるかに多くなり、また定員を示す「員」と記される属吏以外に「以故事置」など、定員外を意味すると考えられる属吏が存在するからである。ここで注目すべきは、尹湾一号・二号木牘の属吏表記が卒史系のものなのに対して、尹湾五号木牘背面のそれは「掾史」として一括され、しかもその中には「以故事置」とされる「掾史」が存在することである。ここから尹湾漢墓簡牘作成段階では郡国府で諸曹の形成は進んでいたが、依然として卒史系の属吏のみが定員として把握されていたと考えられる。このような事情は、尹湾六号墓の墓主が功曹に就任していたにもかかわらず、尹湾一・四号木牘には功曹が見えないことにも反映していると考えられる。尹湾三・四号木牘はまさに、このような属吏制度の変化のする時期に作成されたのである。

このように考えれば、前漢時代の「文学卒史」から後漢時代の「文学掾」へという呼称の変化には、属吏機構の肥大化とその整備も関連していると考えられる。ただし前漢時代にすでに掾史系の属吏は存在するし、また後漢時代に入るとまったく卒史の呼称が消えるわけではない。例えば『続漢書』百官志五の注に引く『漢官』に記す後漢時代の河南尹の属吏構成を見ると、「吏員」として「掾史」とともに「百石卒史」「書佐」が見える⁽⁶⁰⁾。これは、尹湾漢墓簡牘の段階では定員（「吏員」）に含まれなかった「掾史」が、後漢時代には定員として属吏機構の中に位置付けられ、卒史系の属吏と併存するようになったことを物語る。このような状況の中で郡国文学は卒史から掾へと変化するのだから、明らかに掾史の定員化を前提として立場が変化したといえる。

ところで前漢時代から併存する卒史系と掾史系の属吏の解釈について、注目すべきものとして仲山茂氏の研究が挙げられる。⁽⁶¹⁾氏によると、卒史系の属吏と掾史系の属吏は範疇を異にし、前者が主に官秩を示すものであったのに対して、後者は実際の職務内容を示すものであり、卒史でしかも掾や史であることもあるという。この指摘は甚だ示唆に富むものであり、基本的にはこのようにいえると考ええる。しかし郡国文学についても、果たして同様のことがいえるだろうか。例えば氏は、本稿で考えているような郡国文学の中央政府からの派遣について、

そこでは中央の関与はあくまでも卒史の人材派遣までであり、その人物を具体的にどのような職に「署」すかという部分には及んではない。もしも中央集権等の政策的な意図があれば、その職こそが問題とされなければならぬのではなからうか。

と述べ、中央政府の政策的意図に疑問を呈する。⁽⁶²⁾ところがこの論法を適用すれば、郡国文学には卒史と掾の両方が存在するのだから、「文学卒史」として中央から派遣された者は「文学掾」という職に「署」されると想定することも可能である。これでは一定の職が予め決定されていたことになり、仲山氏の意図とは逆に、郡国文学の人事を郡国の守相がどこまで行い得たか疑問になる。ここからも、郡国文学については卒史と掾の存在時期を分けるべきだと考えるが、それよりも問題なのは、郡国文学（卒史）が郡国の守相から何らかの職に「署」されることによつて、本当に中央政府の政策意図が希薄化されるのだろうか。これを考えるために、郡国文学の担っていた郡国府における役割を検討することにしよう。

五 郡国文学の役割

郡国文学の最大の役割ははじめにも触れたように、郡国学にける経書・経学の講授を中心とする教育だと考えられる。前漢時代の例としては、王尊が「郡文学官」に師事して『尚書』『論語』を治めたこと⁽⁶³⁾などが挙げられ、後

漢時代においてもこの役割は変わらない。例えば後漢末に弘農太守となつた令狐邵は、河東郡の郡国文学だつた楽詳のもとに属吏を派遣し、その後令狐国学（「文学」）を設置して弘農郡の学業を再興したといふ。⁽⁶⁴⁾ 恐らく楽詳のもとに派遣された属吏が郡国文学として、令狐邵の設置した学校において教育に当たつたのだらう。

ところでこの郡国文学の施す教育内容が、官学たる経書・经学だつたことからすれば、そこで学ぶ学生（諸生）には当然、その知識を政治に適用できるようになることを要求されたと考えられる。例えば揚州刺史の何武は、州内の郡国の視察（行部）の際に必ず最初に学官に赴き、諸生に「誦論」を試すとともに「得失」を問うたといふ。⁽⁶⁵⁾ この「誦論」とは経書・经学の知識を指すと考えられ、それとともに「得失」が問われているのだから、それは政治的内容を指すといえよう。

このように政治的教養を身につけた諸生は、将来属吏として地方行政の一翼を担うことを期待された。例えば景帝末に蜀郡守となつた文翁は、蜀郡に学官を設置したことで有名であり、またそれ以前から中央の博士に属吏を派遣するなど教育に熱心だつたが、この教育を受けた者のうちで優秀な人材は、文翁から属吏に採用されたり官僚に察掾されたりしている。⁽⁶⁶⁾ これは、文翁の教育重視が政治に有用な人材の養成にあつたことを物語る。この文翁の記事は儒学が官学化される以前の話だが、文翁伝にいうように、彼の学官設置が契機となつて武帝期に各地に郡国学が設置されたとすれば、そこでの教育は文翁と同様の目的を持つて行われたと考えられる。また文翁の事跡と直接関連しなくとも、武帝期には「功令」に示されるように属吏の質的改善が問題となつていたことから、中央における博士弟子制度とともに、この時期に地方においても属吏養成を目的とした郡国学が設置される必然性がある。このような観点で、右の何武が必ず最初に学官に赴いたといふ行動を見れば、地方行政においては、教育による属吏の質的改善というのが最重要課題だつたことを示すといえる。従つて、中央から派遣されて学官で教育に当たる郡国文学は、中央政府による儒学の官学化政策を地方において実践し、それによつて属吏を養成するという任務を担

つていたと考えられるのである。

ただし地方行政において教育が重きをなしたのは、属吏の質的改善のためばかりではない。そこには、武帝の「功令」制定を命ずる詔の冒頭にも「蓋し聞く、民を導くに礼を以てし、之れを風するに樂を以てす（『蓋聞、導民以礼、風之以樂』）」とあるように、最終的には住民の教化という目的があったと考えられる。⁽⁸⁾ このいわゆる「移風易俗」という考え方は文帝・景帝期から盛んに見られ、礼樂によって教化を行おうとする『孝經』が製作される。⁽⁹⁾ このような儀礼を通した教化を行った地方長官として、韓延寿の例が挙げられる。彼は、潁川太守の時に「文学校官諸生」に命じて喪嫁娶の礼を行わせ、また東郡太守に移った時には「学官」を修復して春秋の郷射の礼などを行うなど、儀礼を中心として住民の目に見える形で教化を行い、その結果人々はそれに従ったという。⁽¹⁰⁾ このように韓延寿は、学官を拠点に儀礼を実践して住民を教化した。ここで彼が郡国文学を経験したことを思い起こせば、彼の施策は、郡国文学および学官の役割を十分に認識し、それをフルに活用したものといえるだろう。

以上のように郡国文学は郡国府において教育と教化を担当したが、「功令」にも見られるように教育と教化は本来一体となっていたと考えられる。このことは、後漢時代に郡国の守相が郡国学を復興・設置した記事でも、教育のみならず教化についても記されることから、後漢時代にも引き継がれたとみなせる。しかし郡国文学の役割は、本当にこれだけなのだろうか。例えば郡国の守相に対する助言者としての役割も考えられる。

このような関係を推測できる例として、前にも触れた『史記』滑稽伝の「文学卒史王先生」に関する記事がある。この記事の大筋は、武帝期に中央に召された北海太守が「文学卒史王先生」の助言によって、武帝の下問に無事答えたというものである。⁽¹¹⁾ ここで注目すべきは、この王氏は酒好きで、郡府の筆頭属吏である功曹から問題人物と見なされていたにもかかわらず、太守が彼を伴ったことである。確かにそこでは太守が王氏の熱意に負けて同伴したように記されているが、宮中での皇帝への謁見という儀礼空間における知恵袋としての王氏の有用性を意識してい

たからこそ、王氏を伴ったとも理解できる。これがいえるとすれば郡国の守相にとつて郡国文学は、儒家的知識を持った儀礼面のブレーションとして期待されたと考えられる。⁽⁷⁴⁾このような役割は、中央官府の文学に任用された兎寛の例からも推測できる。兎寛は、廷尉文学卒史となつた当初は廷尉の張湯から重用されなかったが、後に作成した奏文が見事だったことから、儒学の有用性を悟つた張湯から奏讞掾に任用されて「古法の義を以て疑獄を決」したことに⁽⁷⁵⁾よつて、張湯に重用されたといわれる。兎寛はまさに「経術を以て吏事を潤飾する」属吏として、張湯からその役割を期待されたのだろう。この「潤飾吏事」（理念ではなく、実際の政治に適用できる学説）的な政治は、武帝期以降前面に出てくる。⁽⁷⁶⁾このような時、儒家的知識によつて任用された郡国文学をはじめとする各官府の文学は、各長官の行う「潤飾吏事」的な政治におけるブレーションの役割を果たしたといえる。右の「文学卒史王先生」の逸話にも、このような郡国文学の役割が反映しているのだろう。

ところで前の「文学卒史王先生」の逸話については、類似の記事が『漢書』龔遂伝にも見える。そこでは、宣帝期に渤海大守となつた龔遂に関する話題として記され、対象となる時期や郡が異なるものの、基本的な内容は『史記』滑稽伝の記事と一致する。⁽⁷⁷⁾この点は古くから指摘されており、もちろんどちらが本来の話だったかは判断できないが、ここで注目したいのは、滑稽伝で「文学卒史王先生」とされていたのが、龔遂伝では「議曹王生」となっている点である。この二つの記事が共通の話題に基づいているとすれば、「文学卒史」と「議曹」という二つの立場は通用するとも考えられる。とすれば佐原康夫氏が指摘するように、議曹が文学卒史によつて構成されたと考えられ、⁽⁷⁸⁾それに仲山氏の指摘を適用すれば、郡国文学は「議曹」に「署」されることになる。

ここで問題としたいのは、その「議曹」という部局の性格である。兎寛が廷尉文学卒史から就いた奏讞掾は、文学という特定の属吏が任用されるものだったとは断言できないが、「議曹」は、郡国文学など儒家的知識を持った者がもつぱら任用される部局だった。それを物語る史料として『漢書』卷八三朱博伝の記事がある。それによると

「諸生」を好まなかった朱博は、赴任した郡で次々と「議曹」を廃止したという。⁽⁸⁰⁾これは、議曹が儒家的知識を持つ諸生出身の属吏が集まる部局だったことを示す。それ故に朱博は議曹を廃止したのだと考えられるが、その際に彼は「謀曹」を再び置く必要はないといったように、議曹はまたブレーンの意味を持つ「謀曹」とも呼ばれた。このような議曹の性格を考えると、郡国文学がそこに「署」されるのは当然だといえるし、それによって彼らは、儒家的知識を背景として「潤飾吏事」を担当する属吏として、郡国の守相に助言を与えるブレーンの役割を果たしたといえよう。

ところで朱博は何故、議曹を廃止したのだろうか。一般的にいえば諸曹の属吏は、郡国の守相の意志によって選任できるはずなのにもかかわらず、彼は人的構成を変えろという方法をとらなかった。ここから議曹は、思想傾向の異なる郡国の守相にとっては廃止してしまわなければ、自らの意志が貫徹できない部局だったといえるのではないだろうか。すなわち、たとえ議曹が郡国の守相の側近的な部局だったとしても、それは中央政府から派遣された郡国文学が、自動的に選任される部局だったと考えられるのである。それ故に朱博にとっては、その存在が容認できなかったのだらう。ただし議曹が、中央政府によって設置されたとは考えられない。むしろその設置以来、議曹が儒家的知識を持った者の任用される、郡国府における儒家の牙城となっていたのだらう。このように考えると朱博が太守を歴任した成帝期には議曹は、郡国文学など儒家的知識人を専任する部局として定着していたことになる。

これを前提とすれば仲山氏のように、郡国文学がどの職に「署」されるかを問題にして、中央政府の政策意図を疑問視することはできないだらう。すなわち、中央政府から派遣される郡国文学は、諸曹が明確化してくると自動的に議曹にも「署」されるようになり、官学たる儒家的知識によって、郡国学における教育や儀礼を中心とする地方教化、あるいは郡国の守相のブレーンとして、地方行政における「潤飾吏事」政策を推進する役割を担ったと考えられるのである。地方行政は国家の政策の一翼を担うものであり、仲山氏のように郡国の守相の意志による属吏

任用という点のみを取り出して、地方行政の自律化ということを強調するのは、漢代国家の在り方を見誤る危険があるのではなからうか。官府としては独立しつつも、『孝経』をはじめとする儒家的知識を前提として、中央政府が推進する一元的支配を行う官府、それが郡国府などの地方官府であり、それ故にそこでは積極的に地方教化が行われたと考えられるのである⁸³。

それはともかくとして郡国文学に話題をしばれば、本稿で述べたように後漢時代に郡国の守相が彼らを「文学掾」として任用するようになると、彼らが議曹に就くこともなくなると考えられる。何故なら「文学掾」とは諸曹を構成する掾史系の属吏であり、そのみで郡国の守相の側近としての地位が保証されと考えられるからである。例えば『華陽国志』巻一巴志には、

孝桓帝、并州刺史の泰山の但望字は伯闔を以て巴郡太守と為す。懇めて民隠を恤う。郡文学掾の宕渠趙芬、掾の弘農馮尤……等望に詣りて自訟して曰く……。〔孝桓帝、以并州刺史泰山但望字伯闔為巴郡太守。懇恤民隠。郡文学掾宕渠趙芬、掾弘農馮尤……等、詣望自訟曰……。〕

という記事がある。これは、巴郡の属吏に「弘農馮尤」とあることから他郡出身の属吏が存在した例として引用されるが、ここでは「文学掾」が他の「掾」と区別されて記されていることに注目したい⁸⁴。もちろん石刻史料などでは、文学掾とともに掾史の職名が具体的に記される例はあるものの、このように属吏の「文学掾」のみが特記され、それを先頭にして太守に対して提言を行っているのは、郡国府における地位を高さを物語るのではなからうか。この一例のみでは不安な点も残るが、以上のようにいえるのであれば、郡国文学はその設置以来、儒家的思想を背景として、郡国における教育・教化に当たるとともに、郡国の守相のブレーンとしての役割を、後漢時代に至るまで一貫して果たしたといえる。また同様のことは、児寛の例に見られるように、中央官府に配属された文学にもいえると考ええる。このように考えれば、曹操が後漢末に実権を握った時に、曹丕のもとに任用された五官将文学・東宮文

学などをはじめとする文学も、儒家的知識を背景とするブレンだったといえよう。⁽⁸⁵⁾

おわりに

本稿は、新出の尹湾漢墓簡牘の尹湾三・四号木牘に見える記事を手がかりとして、史料制約もあつてこれまでに十分に分析されてこなかった郡国文学について、その任用方法と役割を中心に検討した。その結果、任用方法についての自説を確認するとともに、これまで見過ごされていた郡国文学についての新たな事実が指摘できたと考える。ここでそれを要約すると次のようになるう。

郡国文学は、前漢武帝期における「功令」の制定とともに出現し、儒学の官学化政策を担う存在として中央政府から派遣された。しかし博士弟子制度やそれを補完する明經察挙の沈滞に伴つて、後漢時代に入ると郡国の守相による任用が一般化してくる。それと並行して郡国文学は、それまでの「文学卒史」から「文学掾」と呼称が変化する。この呼称の変化は、これまで十分に認識されていなかったが、前漢後半期からの地方における属吏機構の肥大とその整備を前提として起こると考えられる。そしてその要因としては、郡国文学が本来、教育・教化ばかりでなく、郡国の守相のブレン的な存在だったと考えられることが挙げられる。このような側近的な立場だったからこそ郡国文学は、その任用を郡国の守相自らが行うようになると、その立場が卒史から掾へとスムーズに移行したのだと考えられる。さらにいえばこのようなブレン的な立場は、郡国文学のみならず他の官府の文学にも適用できると考える。すなわち、郡国文学をはじめとする文学は、官学となった儒家的知識を普及するとともに、それを政治の場に活用して「潤飾吏事」的な政治を行う際のブレンとしての役割を担っていたのである。

ところでこのように郡国文学の役割を強調すると、その割にそれに関する史料があまりにも少ないことが気になる。しかしそれが属吏であることからすれば、本稿でも指摘したように、文献史料に残るような主要官僚に昇進す

る前に、多くの郡国文学が淘汰されたと推測される。また彼らの活躍によつて、郡国において儒家的知識を身に付ける者が養成され、その者たちが官僚候補者の中に加われれば、郡国文学の昇進機会はさらに狭められる。このような結果、史料に残る郡国文学出身者が少なくなるのではなからうか。しかし尹湾三・四号木牘の事例でも判明するように、前漢後半期には全国的に郡国文学が存在したことから考えると、たとえ文献の世界からは忘れ去られた存在だとしても、彼らが郡国における儒家思想の浸透に貢献したからこそ、後漢礼教国家が実現したのだと考えられるのである。

注

- (1) 本稿では基本的に、皇帝任命の官秩比二百石以上の官(命官)を官僚、各官府任命の百石以下の吏を属吏とする。ただし属吏の一部には比二百石以上のものも存在するが、それも各官府が任用するという点で官僚とは性格を異にする。この点については、渡辺信一郎「中国古代専制国家論」(同「中国古代国家の思想構造——専制国家とイデオロギー」所収、校倉書房、一九九四年。一九二年初出)を参照。
- (2) 嚴耕望「中国地方行政制度史 甲部 秦漢地方行政制度」七章「郡県学官」(中央研究院歷史語言研究所、一九九〇年。一九六一年初版)。
- (3) 嚴前掲書以外に本稿で参照したのは、陳夢家「関于『文学弟子』的考述」(同「漢簡綴述」所収、中華書局、一九八〇年。一九六四年初出)、平井正士「漢代の学校
- (4) 属吏の任用については、注(2)嚴前掲書、一〇章「遷途徑」、二章「籍貫限制」および浜口重国「漢代に於ける地方官の任用と本籍地との關係」(同「秦漢隋唐史の研究」(下)所収、東京大学出版会、一九六六年。一九四三年初出)を参照。
- (5) 注(3)平井前掲論文および同「公孫弘上奏の功令について」(「杏林大学医学部進学課程研究報告」一、一九七四年)を参照。
- (6) 具体的には、拙稿「漢代博士弟子制度について——公

孫弘の上奏文解釈を中心として——」(『鷹陵史学』一六、一九九〇年)、「漢代博士弟子制度の展開」(『鷹陵史学』一七、一九九一年)を参照。

- (7) この点については、拙稿「尹湾漢墓簡牘の基礎的研究——三・四号木牘の作成時期を中心として——」(『文学部論集』(佛教大学)八三、一九九九年)一二頁で簡単に触れた。本稿は、これを具体的に述べようとするものである。

- (8) 連雲港市博物館・東海県博物館・中国社会科学院簡帛研究中心・中国文物研究所編、中華書局、一九九七年。

- (9) 本稿でいう長吏とは基本的に、『漢書』卷一九百官公卿表の県条に「県令・長、皆秦官、掌治其県。万户以上為令、秩千石至六百石。減万户為長、秩五百石至三百石。皆有丞・尉、秩四百石至二百石。是為長吏」と記される範囲を指し、そこには同じく百官公卿表に「列侯所食県曰国、皇太后・皇后・公主所食曰邑、有蛮夷曰道」といわれる侯国・邑・道の官僚も含む。ただし尹湾三・四号木牘には、それらに加えて通常長吏とはいえない侯家丞や塩官・鉄官の官僚も見える。本稿ではこれまでの拙稿と同様に、これらの官僚も加えて長吏とする。

- (10) 拙稿「尹湾漢墓簡牘よりみた漢代の長吏」(『中国出土資料研究』四、二〇〇〇年)、「漢代における長吏の任用・補論」(『鷹陵史学』二六、二〇〇〇年)、「漢代における長吏の任用——尹湾漢墓簡牘を手がかりとして——」

(『古代文化』五三・一、二〇〇一年) 参照。

- (11) 本稿で用いる尹湾漢墓簡牘の釈文は基本的に『尹湾漢

墓簡牘』掲載のものによるが、尹湾三・四号木牘については、拙稿「尹湾漢墓簡牘三・四号木牘について——その復元を中心として——」(『鷹陵史学』二四、一九九八年)において、筆者が報告書釈文に基づいて不明箇所を復元したものをを用い、また本稿で引用する各釈文の末尾に付す略号も、この拙稿で用いたものと一致する。

ちなみに次に掲げる尹湾三・四号木牘の郡国文学について、その任用された長吏の種別を見ると、一般の県に任用された者が二名(②⑩)と少ないのに対して、邑(①)または侯国が九名(③)と多くを占め、そのうちの四名(⑤⑦⑨)が侯家丞に任用されていることに気付く。このように限られた情報だけからでは、これが何を意味するのかを直ちに判断できないが、県の中でも特殊な位置付けにある邑や侯国の長吏に、郡国文学経験者の多くが任用されたことは、本稿で述べるような彼らの立場と何らかの関係があるのだろうか。なお検討を要する。

- (12) この点を指摘するのは、廖伯源「東海郡下轄長吏名籍」(『簡牘与制度——尹湾漢墓簡牘官文書考証』所収、天津出版社、一九九八年。一六七頁)、および李解民「東海郡下轄長吏名籍」研究」(連雲港市博物館・中国文物研究所編「尹湾漢墓簡牘綜論」所収、科学出版社、一九九九年。五〇頁)である。

- (13) この点は注(10)前掲拙稿「漢代における長吏の任用・補論」六頁を参照。

- (14) ここで彼らの任用された郡を確認すると、①③東郡

・⑥泰山(大山)・⑤山陽(以上、兗州)、④河内(司隸)、⑦上党(并州)という東海郡(徐州)に比較的近い中原諸郡が目立つが、北は⑪漁陽郡(幽州)、西は⑨武都郡(益州)、南は⑧桂陽郡(荊州)・⑩南海郡(交趾)というように、かなり広範囲に分布している。この少数の例から断言するのは危険だが、郡国文学の任用された郡国に教育機関たる郡国学が置かれていたとすれば、成帝期にはすでに漁陽郡や南海郡という辺郡にも郡国学が存在したことになる。

注(3)東前掲論文は、前漢後半期の辺郡には郡国学の設置されていない地域も存在したと想定する(一五九頁)が、このような郡国文学の分布からいえば、必ずしもそのように考えなくともよいのではなからうか。

(15) 注(12)廖前掲論文および同「漢代地方官吏之籍貫限制補証」(廖前掲書所収) 参照。

ちなみに尹湾三・四号木牘には一例ではあるが、郡国文学以外に他郡国の属吏に任用された者がいる。それは「梁国蒙」出身者が「象林候長」という日南郡の属吏に任用された例(4A-2-11)である。これについて廖氏は特に触れないが(注(12)廖前掲書一九〇(一九一頁)、これが辺境警備の属吏であることからすれば、居延漢簡でも地元の張掖郡以外の出身者が属吏に任用されている例もあるように(初山明「漢帝国と辺境社会」(中公新書、中央公論新社、一九九九年、一二八頁参照)、辺境ゆえの特殊性があるのかもしれない。一方前職が官僚だった者の中には「侯家丞」とのみ記され、普通記される

はずの任用侯国名がない例(3A-2-11)もある。

(16) 廖氏は「郡太守文学為学官、職在教授經学、必求經学通明之君子、限於地域、難得佳選、且学官職不治民、籍貫限制蓋為防範治民官吏之徇私、用於学官反而妨礙求才。郡太守文学無籍貫之限制、合於情理」(注(15)廖「漢代地方官吏之籍貫限制補証」一一三頁)と述べる。

(17) 廖氏は「郡文学由朝廷分發至郡国任職、此說為劉增貴兄所提示」と、この考え方を劉增貴氏の意見として紹介し、そこで「然郡文学為太守之属吏、除中央派遣之文学外、太守当亦可自由辟署」と述べ、劉氏の指摘を積極的に採用しようとはしていない(同右一一六頁の注(27))。

(18) 注(3)東前掲論文では「少以文学為官」と記される王章(「漢書」卷七六本伝)も郡国文学の例とするが(一五九頁)、これは文学という評価によって官を得たことをいうであり、郡国文学の例ではない。また『史記』卷一二六滑稽伝には武帝期の北海郡に「文学卒史王先生」なる者が存在し(注(73)参照)、さらに『漢書』卷二二律曆志上の孟康注の記事から、後漢章帝期に「零陵文学奚景」なる者が存在したことが知られる(「漢章帝時、零陵文学奚景於冷道舜祠下得白玉瑁」。しかしこの二例は、本稿の分析で必要な出身郡国に関する情報がないので一覽表では省いた。ただし「文学卒史王先生」の記事については、別の角度から後に本文で取り上げる。なお石刻史料にも郡国文学の記事は見えるが、これらも本稿の分析で必要な出身郡国に関する情報が得られないので、本稿では省略する。ちなみに石刻史料の例は、いずれも

後漢時代のものである。

- (19) 『漢書』卷七一本伝「雋不疑、字曼倩、勃海人也。治春秋、為郡文学、進退必以礼、名聞州郡。武帝末、郡国盜賊群起、暴勝之為直指使者、衣繡衣、持斧、逐捕盜賊、督課郡国、東至海、以軍興誅不從命者、威振州郡。勝之素聞不疑賢、至勃海、遣吏請与相見」。

- (20) 『漢書』卷七七本伝「蓋寬饒、字次公、魏郡人也。明經為郡文学、以孝廉為郎」。

- (21) 楊由(n)は「楊由、字哀侯、蜀郡成都人也。少習易、并七政・元氣・風雲占。為郡文学掾。時有大雀夜集於庫樓上、太守廉范以問由」(『後漢書』伝七二方術伝上・本伝)とあって、蜀郡太守就任の経験を持つ廉范(『後漢書』伝二一廉范伝「建初中、遷蜀郡太守」)との関係で、地元任用されたことが判明する。また趙芬(q)も、并州刺史の但望が巴郡太守に就任した時の記事(『華陽国志』卷一巴志、本文に後掲)から、地元任用されたことが判明する。しかしいずれも、彼らの郡国文学在任中の記事であり、誰によって任用されたかまでは判明しない。

- (22) 呉祐(o)は「陳留」太守冷宏召補文学、宏見異之、擢孝廉(『後漢書』伝五四本伝注引「陳留耆旧伝」)とあるように、陳留太守の冷宏が「召して文学に補した。趙寧(r)は「大尉趙公、初為九卿、適子寧還蜀、(太守高)朕命為文学」(『華陽国志』卷三蜀志)とあるように、蜀郡太守の高朕が「命じて文学と為し」た。そして樂詳(s)は「杜畿為(河東)太守、署詳文学祭

酒」(『後漢書』伝六九儒林伝下・本伝注引「魏略」)とあるように、河東太守の杜畿が「文学祭酒に署し」ている。

- (23) 『三国志』卷二九方技伝・本伝「管輅、字公明、平原人也。……清河太守華表、召輅為文学掾。安平趙孔曜薦輅於冀州刺史裴徽、……徽於是辟為文学從事」。同注引「輅別伝」「輅為華清河所召、為北冀文学、一時士友無不歎慕。……(冀州刺史裴徽)即徵召為文学從事」。ここに引用したように管輅はその後、清河郡の属する冀州刺史の裴徽によって州の「文学從事」にも任用されている。

- (24) 注(4) 敵「籍貫限制」三五二―三五三頁参照。

- (25) 『漢書』卷八一本伝「学者多上書薦衡經明、当世少双、令為文学就官京師、後進皆欲從衡平原、衡不宜在遠方。事下太子太傅蕭望之・少府梁丘賀問、衡對詩諸大義、其對深美。望之奏衡經学精習、說有師道、可觀覽。宣帝不甚用儒、遣衡歸官」。

- (26) ここで平原文学就任後の匡衡の異動過程を「史記」と『漢書』の記載で比較しておこう。まず『漢書』では、学者の上書が宣帝によって却下された後、宣帝没後に即位した元帝の時期に、「長安令楊興說(大司馬車騎將軍領尚書事史)高曰……高然其言、辟衡為議曹史、薦衡於上、上以為郎中、遷博士給事中」とあるように、長安令の楊興の推薦によって大司馬車騎將軍の史高に辟召されて議曹史となり、さらに史高の元帝への推薦で郎官に登用されて博士(給事中)となった。その後、光祿大夫

・太子少傅・光祿勳・御史大夫・丞相と異動している。一方『史記』では「数年、郡不尊敬。御史徵之、以補百石屬薦為郎中、而補博士、拜為太子少傅、而事孝元帝」とあるように、郡国文学就任後、数年で「郡不尊敬」という状況になり、これをきつかけとしたか否かは不明だが、御史が彼を「徵」して百石属に補した後、元帝に推薦して郎官に登用された。その後は、博士・太子少傅・光祿勳・御史大夫・丞相と、光祿大夫就任が落ちているが、『漢書』と同様の異動をしている。これを見ると『史記』と『漢書』では、郎官就任後の記述は基本的に一致する。また郎官就任以前についても、辟召の主体（大司馬か御史大夫か）を除けば、郡国文学就任後に中央に辟召されている点は一致している。従って、『史記』『漢書』いずれにおいても、彼の異動過程は同じになると考えられ、『史記』の方で光祿大夫就任の記載がないことからすれば、『史記』では若干の省略があったと考えられる。

(27) 張玄は「張玄、字君夏、河内河陽人也。少習顏氏春秋、兼通數家法。建武初、舉明經、補弘農文学、遷陳倉丞」（『後漢書』伝六九儒林伝下・本伝）とされ、また魏応は「魏応、字君伯、任城人也。少好学。建武初、詣博士受業、習魯詩。閉門誦習、京師稱之。後歸為郡吏、舉明經、除濟陰王文学。以疾免官。教授山沢中、徒衆常數百人。永平初、為博士、再遷侍中」（同右本伝）と記される。

ところで、魏応の「濟陰王文学」という表記には若干

の問題がある。何故なら、濟陰国が置かれるのは永平五年（七二）であり（『後漢書』伝四〇孝明八王伝）、「永平初」には魏応は博士に任用されているから、それ以前になる郡国文学就任時期には濟陰国が存在しないことになる。あるいは「王」が「郡」の誤りかもしれないし、また光武帝期に存在した濟南国など、似たような名の王国と混同されているのかもしれない。

(28) 注(4)浜口前掲論文参照。

(29) この点については、拙稿「漢代明經考」（『東洋史研究』五四―四、一九九六年）を参照。

(30) 『漢書』卷八一本伝「張禹、字子文、河内軹人也。至禹父徙家蓮勺。……及禹壯、至長安学、從沛郡施讎受易、琅邪王陽・膠東庸生問論語、既皆明習、有徒衆、舉為郡文学。甘露中、諸儒薦禹、有詔太子太傅蕭望之問。禹对易及論語大義、望之善焉。奏禹經学精習、有師法、可試事。奏復、罷歸故官。久之、試為博士」。

(31) 梅福は「字子真、九江寿春人也。少学長安、明尚書・穀梁春秋、為郡文学、補南昌尉」（『漢書』卷六七本伝）とされ、また諸葛豊は「字少季、琅邪人也。以明經為郡文学、名特立剛直。貢禹為御史大夫、除豊為属、举侍御史」（『漢書』卷七七本伝）と記される。

(32) 注(29)前掲拙稿参照。ちなみに漢代の察举科目に「文学」があり、また『塩鉄論』などには、それによつて察举されたと考えられる「文学」が見える。当然これらと本稿で問題としている郡国文学との関係が気になるが、管見の及ぶ限りでは、両者の直接的な関連は見出せない。

そこで右に挙げた「文学」については、本稿では考察の対象からはずすことにする。

(33) 注(6)前掲拙稿参照。

(34) 「功令」に「一歳皆輒課。能通一藝以上、補文学掌故缺。其高弟可以为郎中者、太常籍奏。即有秀才異等、輒以名聞。其不事学若下材及不能通一藝、輒罷之、而諸諸不称者罰」とある。

『史記』と『漢書』とで多少の文字の異同があるが、以下に引用する「功令」の規定については『史記』によることにする。

(35) 『史記』儒林伝索隱に「如淳云、漢儀、弟子射策、甲科百人補郎中、乙科二百人補太子舍人、皆秩比二百石、次郡国文学、秩百石也」とある。この規定の適用時期については、注(10)前掲拙稿「漢代における長吏の任用・補論」を参照。なお注(3)平井前掲論文(九九〜一〇〇頁)も、この点を指摘する。

(36) 「功令」に「請選秩其秩比二百石以上及百石通一藝以上補左右内史・大行卒史、比百石已下補郡太守卒史、皆各二人、辺軍一人。先用誦多者、若不足、乃挾掌故以補中二千石属、文学掌故補郡属、備員」とある。

ちなみに掌故・文学掌故の官秩については、注(6)に掲げた以前の拙稿に若干の修正が必要である。以前はこれらの官秩を単純に百石と考えていたが、右の規定によると、掌故は「中二千石属」に補し、文学掌故は「郡属」に補すことになっている。属の官秩は斗食だから、昇進を前提とするならば、掌故・文学掌故の官秩は佐史

の可能性が高い。このように考えると、本文で触れる兎寛が掌故から「功次」によって廷尉文学卒史になった状況が「昇進」として説明できる。また「郡太守卒史」として郡のみが対象となり、王国の属吏には及んでいないことが気になる。あるいは尹湾三・四号木牘の郡国文学がいずれも郡のみに限られるのは、それを裏付けているのか。これらの点については、稿を改めて検討したい。

(37) 『漢書』卷五八本伝「兎寛、千乘人也。治尚書、事歐陽生。以郡国選詣博士、受業孔安国。……以射策為掌故、功次、補廷尉文学卒史」。

(38) 「功令」は注(36)の記事に続いて「請著功令。佗如律令」と一括して奏請され、武帝によって「制曰可」として承認された。

(39) 具体的には注(36)前掲史料を参照。

(40) 注(36)の史料中には「補左右内史・大行卒史」と「補中二千石属」とある。

(41) 例えば『後漢紀』卷七光武帝紀七の建武一五年(三九)春二月条には「上嘗与功臣宴飲、歴問曰、諸君不遭際会、与朕相遇、能何為乎。鄧禹対曰、臣嘗学問、可郡文学。上笑曰、言何謙也、卿鄧氏子、志行脩整、可掾功曹。各以次対……」という逸話がある。ここで鄧禹は、自分は「学問」をしたから「郡文学」となるのがふさわしいという。彼は「詩」を学び、さらに太学で学んだ(「受業長安」)ようであるから(『後漢書』伝六本伝)、その「学問」は儒学を指すことは間違いない。すなわち、学問Ⅱ儒学Ⅱ文学という構図が考えられるのである。ち

なみに右の逸話は『後漢書』伝一二馬武伝にも記されるが、そこでは「郡文学博士」となっている。

- (42) 例えば兎寛は『漢書』本伝で「廷尉文学卒史」と記されるのが、『史記』儒林伝では「廷尉史」となっている。注(10)前掲拙稿「漢代における長吏の任用・補論」で若干言及したように、廷尉史の官秩は卒史と同一の百石だと考えられ、このような言い替えも可能である。そうすると「廷尉史」の中で、「功令」後半部分の規定によって任用された者が「廷尉文学卒史」と称されたと考ええることもできる。なお紙屋正和氏は「漢時代における長吏の任用形態の変遷について・再論」(『七隈史学』二、二〇〇一年)三二頁の注(3)で、廷尉史の官秩を二百石だとして、右の筆者の考え方を批判する。しかし史料解釈の問題のみならず、公府をはじめとする比二百石以上の属吏の評価についても、にわかに承服できない点がある。そこで紙屋氏の批判に対しては、稿を改めて答えることにしたい。

- また郡国学は一般に「学官」と呼ばれるが、一方で「文学学校官」(注(71)参照)や「文学」(注(64)参照)と記される場合がある。後者は恐らく、郡国文学が学官の専任として派遣されるようになってからの名称であろう。

- (43) このように考えれば、注(5)に掲げた平井氏の二論文で指摘するような、射策の明経者への開放ということも考える必要がなくなる。

- (44) この点については、注(10)前掲拙稿「漢代における長

吏の任用・補論」を参照。

- ちなみに注(42)紙屋前掲論文は、筆者が右の拙稿で、察举制度は基本的には三百石以上の官僚を登用する制度だとみなすべきとしたことに對して、孝廉や射策で比三百石の郎官や二百石の太子舍人に登用した事実を、どのように評価するのかと疑問を呈する。しかし同右拙稿を含む注(10)前掲の諸拙稿で限定を付けているように、孝廉や射策よって登用される郎官については、官秩のみならず、その立場から再検討する余地があると考えている。またこれと関連して筆者が注(10)前掲拙稿「漢代における長吏の任用」で、功次と察举を二項対立的に分析すべきでないとしてことについて、紙屋氏は孝廉と功次に限定して、この「二項対立的」という表現を批判する。しかし筆者の意図は、これまでの研究が功次か察举かいずれか一方に重点を置いて分析してきたことを指して、「二項対立的」といったかたがたのである。筆者は、漢代に存在した多様な登用経路を、今後は一体のものとして分析しなければならないと考える。

- (45) 『漢書』本伝によれば匡衡は、注(25)に記したように、長安令の楊興の推薦によって、大司馬の史高に辟召されたことから昇進の手がかりを得る。

- (46) 前漢時代の例を中心に挙げると、雋不疑(a)は「(暴)勝之遂表薦不疑、徵詣公車、拜為青州刺史」(『漢書』本伝)とあるように、中央から派遣された直指使者の暴勝之の「表薦」によって武帝から刺史に拔擢され、韓延寿(b)は「時魏相以文学对策、……」

(霍) 光納其言、因擢延壽為諫大夫」(『漢書』本伝)とあるように、賢良文学に察挙された魏相の対策によつて、大將軍の霍光にその存在を知られて諫大夫に拔擢された。そして張禹(e)は「諸儒」の推薦によつて太子太傳の蕭望之にその存在を知られてゐた後に博士となり(注(30)参照)、諸葛豐(f)は御史大夫の貢禹に辟召された後に侍御史になつた(注(31)参照)。さらに鄭崇(h)も「崇少為郡文学史、至丞相大車属。弟立与高武侯傳喜同門学、相友善。喜為大司馬、薦崇、哀帝擢為尚書僕射」(『漢書』卷七七本伝)とあるように、辟召によつて丞相大車属となつた後に、大司馬の傳喜によつて哀帝に推薦されて尚書僕射となり、崔篆(i)は「王莽時為郡文学、以明經徵詣公車」(『後漢書』伝四二崔駰伝)とあるように、王莽によつて徵召されている。なお郡国文学就任後に孝廉に察挙された蓋寛饒(注(20)参照)は、その後「挙方正、对策高第、遷諫大夫行郎中戸将事」とあつて、公卿もかわる可能性のある方正に察挙されて昇進している。

(47) 注(6)および注(29)の拙稿を参照。

(48) 同右。

(49) 注(3)安・熊前掲論文(一三五頁)は、鄭崇や管輅の例を挙げて「文学は簡称、正式的官名応為文学掾和文学史」と述べる。

(50) 注(3)平井前掲論文は、『漢書』の記載をとつて匡衡を「平原文学」だとみなし、『卒史』は付かないと考え(一一八頁)。しかし「平原文学」だけでは職階を示

す表記がないことになり、本来は何らかの職階を示す表記が付いたと考えるべきである。従つて平井氏のようにその記事内容の信憑性のみから、そこに「卒史」が付かないと断定することはできない。特にこの記事を書いた褚少孫が、次に指摘するように前漢時代の人であることからすれば、記事内容はともかくとして、職名表記には当時の一般的な表記が用いられていると考えるべきである。

(51) 注(46)前掲史料参照。

(52) 『史記』卷一二武帝紀索隱に「張晏云、褚先生、潁川人、仕元成間」とある。

(53) 『漢書』儒林伝には元帝期に「郡国文学と直接関連するかどうか不安もあるが、これも郡国の儒学関係の属吏が「卒史」だつた傍証になるかもしれない。

(54) 文学卒史と文学掾の関係について廖伯源氏は、卒史に欠員が生じた時に掾がその地位に就くと考える(注(12))。廖前掲書二九・一一二・一三七頁。これは、尹湾漢墓簡牘作成の段階では、卒史が定員を示す表記だったのに対して、掾や史が定員外の属吏も含んだ、実際に存在した属吏全体を示す表記だったことからくる解釈である(同右六五頁)。確かに尹湾一号・二号木牘と五号木牘背面に見える属吏数の違いについては、後述する如く廖氏のように解釈できるが、そこから卒史が掾の中から選ばれたと考えるのには無理がある。なお後漢時代の石刻史料にも「文学掾」とする記載がある。

(55) 尹湾一号木牘では成帝期の東海郡府には、卒史九人・

属五人・書佐一〇人・齋夫一人の合計二五名の属吏が存在した。また『史記』卷一二〇汲黯伝集解の如淳注が引く漢律によると、郡国府の属吏定員は「卒史・書佐各十人」の合計二〇人とされる。それが後漢時代に入ると属吏数は、『続漢書』百官志五・郡の条に引く『漢官』で「河南尹吏員九百二十七人、十二人百石。諸県有秩三十五人、官属掾史五人、四部督郵史部掾二十六人、案獄仁恕三人、監津渠漕水掾二十五人、百石卒史二百五十人、文学守助掾六十人、書佐五十人、脩行二百三十人、幹小史二百三十一人」（なお「卒史」は「卒吏」と記されるものを改めた）といわれる、河南尹の九〇〇人以上や、『後漢書』伝七一独行伝・陸続伝に「（陸続）還為（会稽）郡門下掾。是時楚王英謀反、……統与主簿梁宏・功曹史駟勲及掾史五百餘人詣洛陽詔獄就考」とある、会稽郡の五〇〇人以上などと増加する。

(56) 注②「嚴前掲書『郡府組織』および佐原康夫『漢代の官衙と属吏』（同『漢代都市機構の研究』所収、汲古書院、二〇〇二年。一九八九年初出）参照。

(57) 『続漢書』百官志五・郡の条に「皆置諸曹掾史。本注曰、諸曹略如公府曹、無東西曹」とある。

(58) 拙稿「漢代における郡県の構造について——尹湾漢墓簡牘を手がかりとして——」（『文学部論集』（佛教大学）八一、一九九七年）。

(59) ただし五号木牘背面の記載に功曹の記載がなかったとはいえない。何故なら、当該木牘は上端が大きく破損し

一段目の記載に不明な部分が多くあり、ここに功曹の記載があった可能性があるからである。なお本稿との関連でいえば当該木牘一段目の「□学六人員」なる記載が注目される。この破損部分の文字に「文」が入るとすれば、郡国文学が定員として六人存在したことになるが、確実なことはいえない。文学だとすれば「文学卒史」の省略形だろう。

(60) 注⑤参照。

(61) 仲山茂「漢代の掾史」（『史林』八一―四、一九九八年）。

(62) 同右九四〇九五頁参照。

(63) 『漢書』卷七六本伝（王尊）事師郡文学官、治尚書・論語、略通大義。復召署守属治獄、為決曹史。

(64) 『三国志』卷一六倉慈伝引『魏略』「令狐邵、字孔叔……仍歴宰守。後徙丞相主簿、出為弘農太守。……是時郡無知経者、乃歴問諸吏、有欲遠行就師、輒仮遣、令詣河東就楽詳字経、粗明乃還、因設文学。由是弘農字業転興」。なお楽詳については、注22を参照。

(65) 『漢書』卷八六本伝（何）武為刺史、二千石有罪、応時举奏、其餘賢与不肖敬之如一、是以郡国各重其守相、州中清平。行部必先即学官見諸生、試其誦論、問以得失、然後入伝舎、出記問墾田頃畝、五穀美恶、已乃見二千石以為常。

(66) 『漢書』卷八九循吏伝・本伝「文翁、廬江舒人也。少好学、通春秋、以郡県史察举。景帝末、為蜀郡守、仁愛好教化。見蜀地辟陋有蛮夷風、文翁欲誘進之、乃選郡県

小吏開敏有材者張叔等十餘人親自飭厲、遣詣京師、受業博士、或學律令。減省少府用度、買刀布蜀物、齎計吏以遺博士。數歲、蜀生皆成就還歸、文翁以為右職、用次察舉、官有至郡守刺史者。又修起學官於成都市中、招下県子弟以為學官弟子、為除更繇、高者以補郡県吏、次為孝弟力田。常選學官僮子、使在便坐受事。每出行県、益從學官諸生明經飭行者與俱、使伝教令、出入閭閻。県邑吏民見而榮之、數年、爭欲為學官弟子、富人至出錢以求之。繇是大化、蜀地學於京師者比齊魯焉。至武帝時、乃令天下郡国皆立學校官、自文翁為之始云。

- (67) 右に引いた文翁伝の記事では、郡国学の設置は「武帝時」とされるが、『華陽国志』では、卷三蜀志に「孝景帝嘉之、令天下郡国皆立文学」とあり、また卷一〇上蜀郡士女志にも同様の文がある。これらによると、文翁の学官設置を契機とする全国への郡国学の設置は景帝期とされる。

- (68) 「功令」では、注(36)に引いた部分の前提として「小吏浅聞、不能究宣、無以明布諭下」という認識が示される。

- (69) 武帝の詔は『史記』『漢書』の両儒林伝および『漢書』卷六武帝紀・元朔五年(前一二四)夏六月条に記される。また「功令」の中にも「教化之行也、建首善自京師始、由内及外」と教化の必要性が記される。

- (70) この点については、渡辺信一郎『「孝経」の国家論——秦漢時代の国家とイデオロギー——』(注(1)渡辺前掲書所収。一九八七年初出)を参照。

- (71) 『漢書』卷七六本伝「(潁川太守韓)延寿、於是令文学校官諸生皮弁執俎豆、為吏民行喪嫁娶礼。百姓遵用其教、壳偶車馬下里偽物者、棄之市道。数年、徙為東郡太守、黃霸代延寿居潁川、霸因其迹而大治。延寿為吏、上礼義、好古教化、所至必聘其賢士、以礼待用、広謀議、納諫争、挙行喪讓財、表孝弟有行、修治学官、春秋郷射陣鍾鼓舞、弦、盛升降揖讓、及都試講武、設斧鉞旌旗、習射御之事」。

- (72) 注(3)東前掲論文一五九頁に掲げる諸例を参照。なお郡国文学の儀礼を通じての教化という役割については、注(3)安・熊前掲論文も指摘する(一三六頁)。

- (73) 『史記』滑稽伝「武帝時、徵北海太守詣行在所。有文学卒史王先生者、自請与太守俱、吾有益於君。君許之。諸府掾功曹白云、王先生嗜酒、多言少実、恐不可与俱。太守曰、先生意欲行、不可逆。遂与俱。……王先生曰、天子即問君何以治北海、令無盜賊、君対曰何。対曰、選扱賢材、各任之以其能、賞異等、罰不肖。王先生曰、対如是、是自嘗自伐功、不可也、願君対言、非臣之力、尽陛下神靈威武所變化也。太守曰、諾。召入、至于殿下、有詔問之曰、何於治北海、令盜賊不起。叩頭対言、非臣之力、尽陛下神靈威武之所變化也。武帝大笑曰、於呼、安得長者之語而称之。安所受之。対曰、受之文学卒史。帝曰、今安在。対曰、在官府門外。有詔召拜王先生為水衡丞、以北海太守為水衡都尉」。
- (74) 注(56)佐原前掲論文は、次に触れる龔遂伝とのかかわり、

「議曹」のメンバーは、前述のように公孫弘によつて郡県に設けられた儒官である文学卒史や掌故だろう。

……彼等（＝議曹）の職務はもちろん言論をもつて長官を補佐することである。（二二六頁）

と述べる。日頃の行動で問題のある「王先生」も本来は佐原氏のいうような「言論をもつて長官を補佐する」ブレンであったと考えられる。

なお郡国文学の役割を本稿のように考えれば、匡衡が郡において尊敬を受けなかったことが気になる。しかしこれは前にも触れたように、郡国文学が中央派遣で出身郡国以外の郡国に任用された際の立場の弱さを示しており、基本的には萬不疑が州郡に名を知られたように、地元で注目される存在だったと考えられる。ちなみに「王先生」の問題行動も、匡衡のような立場に置かれたゆえの行動だったのかもしれない。

(75) 『漢書』卷五十八本伝「時張湯為廷尉、廷尉府尽用文史法律之吏、而寬以儒生在其間、見謂不習事、不署曹。除為從史、之北地視畜數年。還至府、上畜簿、会廷尉時有疑奏、已再見卻矣、掾史莫知所為。寬為言其意、掾史因使寬為奏。奏成、誦之皆服、以白廷尉湯。湯大驚、召寬与語、乃奇其材、以為掾。上寬所作奏、即時得可。異日、湯見上。問曰、前奏非俗吏所及、誰為之者。湯言見寬。上曰、吾固聞之久矣。湯由是鄉学、以寬為奏讞掾、以古法義決疑獄、甚重之」。

(76) 本稿でいう「潤飾吏事」の考え方については、拙稿「漢代の儒学と国家——武帝期「官学化」議論を中心に

——」（『史学論集——佛教大学文学部史学科創設三十周年記念』所収、同論集刊行会、一九九九年）を参照。

その前提となるのは、『漢書』卷八九循吏伝序に「孝武之世、外攘四夷、内改法度、民用彫敝、姦軌不禁。時少能以化治称者、惟江都相董仲舒・内史公孫弘・兒寬、居官可紀。三人皆儒者、通於世務、明習文法、以経術潤飾吏事、天子器之。仲舒数謝病去、弘・寬至三公」と記されることである。なお『史記』卷九九叔孫通伝に「叔孫通笑曰、若真鄙儒也、不知時変」と記されるのも、「潤飾吏事」と軌を一にすると考えられる。

(77) 『漢書』卷八九循吏伝・龔遂伝「上（宣帝）以為渤海太守。……数年、上遣使者徵遂、議曹王生願從。功曹以為王生素奢酒、亡節度、不可使。遂不忍逆、從至京師。王生日飲酒、不視太守。会遂引入宮、王生醉、從後呼曰、明府且止、願有所白。遂還問其故、王生日、天子即問君何以治渤海、君不可有所陳對、宜曰、皆聖王之德、非小臣之力也。遂受其言。既至前、上果問以治状、遂對如王生言。天子說其有讓、笑曰、君安得長者之言而称之。遂因前曰、臣非知此、乃臣議曹教戒臣也。上以遂年老不任公卿、拜為水衡都尉、議曹王生為水衡丞」。

(78) 『史記』滑稽伝索隱は「漢書（循吏伝）、宣帝徵渤海太守龔遂。非武帝時、此褚先生記謬耳」とするが、これも褚少孫の補筆部分の信憑性を疑った上での解釈である。
(79) なお佐原氏は、議曹の構成員として文学掌故も想定する（注74）に引用した佐原論文参照）が、本稿で述べたようにそれは郡国文学就任以前に任用されるもので、文

学掌故が直接議曹の構成員となることはないと考える。

(80) 『漢書』卷八三本伝「博尤不愛諸生、所至郡輒罷去議曹、曰、豈可復置謀曹邪。文学儒吏時有奏記称説云云。

博見謂曰、如太守漢吏、奉三尺律令以從事耳、亡奈生所言聖人道何也、且持此道帰、堯舜君出、為陳説之。其折逆人如此。視事数年、大改其俗、掾史礼節如楚・趙吏。

(81) 注(61)仲山前掲論文は、宮崎市定氏(『九品官人法の研究——科挙前史——』、東洋史研究会、一九五六年)

や注(70)渡辺前掲論文が指摘する官府の連合艦隊論を援用して、各官府の自律化を補強しようとする。しかし渡辺氏が『孝経』は、私的収奪と利権化の構造におおわれた小吏層の内部に儒家的素養が浸透してゆく、その橋頭堡としての社会的機能を果たしていたと言える(『渡辺前掲論文、二五六頁』)と指摘することを参照すれば、たとえ各官府の自律化があったとしても、それは機構面でのものであり、思想的には儒家思想に一元化されていくと考えられる。従って仲山氏のいうような国家と在地社会との関係の変化があるとすれば、それは社会の自律化ではなく、儒家思想による社会の国家的統合の方向へと向かうのではなからうか。

(82) 注(4)前掲浜口論文。

(83) もっとも、テキストによつては「掾弘農馮尤」の

「掾」字がないものもあるが、各校注本ではこの字が入っている。本稿では船木勝馬編『華陽国志訳注稿

(一)』(『アジア・アフリカ文化研究所研究年報 一九七四年』(東洋大学)、一九七四年)、劉琳『華陽国志校

注』(巴蜀書社、一九八四年)、任乃強『華陽国志校補図注』(上海古籍出版社、一九八七年)を参照した。

(84) 石刻史料については、注(2)嚴前掲書および注(3)に

掲げた陳論文や安・熊論文に取り上げられる諸例を参照。なお「文叔陽食堂画像題字」(『金石補正』卷四)には、文叔陽の履歴として「故曹史行亭市掾・鄉齋夫・廷掾・功曹・府文学掾」とある。これが異動の過程を示すとすれば、本稿との関連では文学掾の地位の高さを推測できそうだが、他の諸例を参照するとなお検討の余地がある。

(85) 渡邊義浩「三国時代における「文学」の政治的宣揚——六朝貴族制形成史の視点から——」(『東洋史研究』五四—三、一九九五年)は、曹丕のもとに置かれた五官将

文学などに、儒家的価値観とは別の価値観の存在を見出そうとするが、本稿のように郡国文学など諸官府の文学の系譜をたどれば、それには氏の指摘するような特別の意味を見出せないと考えられる。

〔付記〕本稿は、平成一四年度佛教大学特別研究助成による研究成果の一部である。